
元暗殺者現執事

やもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元暗殺者現執事

【NZコード】

N5365Y

【作者名】

やもめ

【あらすじ】

魔法と現代科学が混在する世界観。元暗殺者で、今は命の恩人であり、大切で愛しいお嬢様の為なら何でもして、お嬢様を狙う敵を容赦せず殺す執事のチエニ・スキアと、将来は魔術師の中でトップを取る逸材のお嬢様と呼ばれるイルミナル公爵家長女リュミール。チエニはお嬢様のそばに居れば満足。リュミールは完全に独占欲があるが、チエニに対して負い目があり接近出来ない。そして第三者介入もあり…。基本的にチエニ視点で、リュミール万歳の独白が多いです。また他の視点も入れる予定。人が死にま

४०

生きがいを見つけました（前書き）

後輩のアカウントを使用しています。
私の書いた作品はこれだけです。

生きがいを見つけました

「」は青い惑星で、大陸は非常に大きい「」、ダーリア大陸のみで、大陸周りに10万を越える島が存在するハ割海の本当に青いだけの惑星です。

そして私達の居るシリバニア王国は大陸の東側の魔術師と科学が共存する伝統主義陣営の国家の一つです。

昔は技術が無かつたので、魔術師は重宝されましたが、科学が発展すると、暴走すれば大量破壊、暗殺や禁術の呪いなどが危険と手のひら返しで活躍の場は無くなっていますが…

現在は術の使用を外では原則厳禁とし、主に戦場や病院の回復魔法や闘技の見せ物以外には使われなくなっています。

まあそれ以前に、伝統主義陣営以外の国では自由結婚で魔術師の血が薄れて魔術師の数は極端に減っていますが…

そんな中でもこの王国は特異な国で、

まず国王が魔術師、貴族も魔術師か旧騎士家系
本家伝統至上主義国家なのです。

至上主義と言つても、当然一般国民が大半なので現代技術も持ち合わせてています。

しかし大陸では数校しかなく、その中でも最高峰の魔術学園を有し、魔術院を国家機関として存在するのですから気合いの入れ方が違います。

まあ、ここまでで説明は終えましょう。

それでは私がなぜ執事をしてるかって？
まあ簡単な話拾われました。

簡単な暗殺任務と思いきや、クライアントが馬鹿で逆襲された挙げ
句私を売り。

突如呼ばれて行つてみれば、暗殺対象の小隊規模の私設兵隊に囲ま
れました。

全員殺しましたが、傷を負つてしまい血を失い、雨にも降られ、住
宅地区の反対側の人の居ない所で動けなくなり、死を覚悟しました。
しかし悪運が良く、気付いたらイルミナル公爵家のベッドの上に居
ました。

そしてそこで会つたのが魔術師として将来有望な長女リュミエール
様。

彼女は典型的な箱入り娘で、無口無表情の自分に笑顔で献身的で更
に朗らかで、最初は警戒してたが、段々と彼女に惹かれていきまし
た。

しかし当主ガルモンド様は私を見抜いていました。

私は告発と死刑を覚悟しました。

「娘の執事であり兵となってくれないか？」

ガルモンド様の言葉でした。

告発をしない代わりに、反魔術過激派の人間からリュミエール様を
死守する。

私は初めて運命というものを感じました。
恩返し以上にあの方に仕えられる。

短い期間で完全に壊れましたさ、ええ。

そして二年経つた現在。

「おはよひじやこます。チヒ　一一せん」

「おはよひじやこますお嬢様」

公の場ではしつかりしても、今は少し戻れたりする變じい方、
それが命がけで守っている大切な方。
彼女の為なら喜んで戦いましょう。

変態？それがなんですか？

朝の風景（前書き）

まだ平和です。
執事はどんどんこわれていく…
銃器はアカウントを貸してもらっている後輩の夕霧に聞きました。

0625

お嬢様起床

いつも通りの起床、しかし学院の生徒会で予算編成の確認で就寝が遅かつた為に眠そうだ。

私が何があつても守るリュミエールお嬢様は、大陸に数校で、そして最高峰の12年制魔術専門学院、フェルザノ王立学院の高等部生徒会長を最年少6年生から現在9年生まで続け、卒業までその地位は確固たるものと言われております。

まあお嬢様の素晴らしいお顔に隈はいけませんので、化粧スタッフが隠すとして、私はまず朝食のセッティングをしなければ…

ああ、ちなみに当主のガルモンド様は現在王都に出張しており、奥様、メリアナ様はイルミナル家が経営している病院の大陸中央進出の為にいらっしゃいません。

決して親子仲は悪いわけではなく、むしろ溺愛しています。

証拠に私の首にはお嬢様に不埒な事をした瞬間に死ぬ呪いがかかっていますが、別に構いません。それで近くに居れるなら。

食堂には既に2人が準備している

「フェン、ユウ、準備は？」
「完了です、チエニさん」
「無事故98日目達成です！」
「当たり前だ」

上は細身の従僕兼お嬢様専属運転手のフェン・カシウス。

元は王国軍の中尉だったが、とある理由で一年前にここに来た。

下はお嬢様専属メイドでこの国では珍しい黒髪のユウ・ナミエであ

る。

彼女は一応普通の出だが、数枚同時食器破壊「一枚で国民の平均月収相当」、通称「デス・スクリム」を普通にやらかす、ちまたではドジつ娘というものらしいが、実際は殺意の対象にしかならない。それでもクビにならないのはあまりに無邪氣で純粹で、チヒーですら殺意を通り越してあきれて、そして何だか気にかけてしまうのだから恐ろしい子。

既にセツティングは完了しており、皺一つない完璧な仕上がりである。

しばらく待つと

「おはよひじやこます、皆さん」

「「「おはよひじやこしますお嬢様」」

制服姿のお嬢様が入室する。

彼女は使用人にもしつかりと挨拶するお方であるので、朝から気持ちが良い。

素早く席を引き、座るのを確認してから料理をお出しうる。

今日はシンプルに甘さ控えめのパンケーキである。

朝が苦手な方ですので、とりあえず収めて欲しいので。

彼女はパンケーキを食べると

「美味しい」

と顔を綻ばせる。

それを見るだけで私はどんな事よりも嬉しく感じます。

1から100まで良い所を挙げろ言つなら私は1000は答えられる自信があります。

「「「おつかれさまでした」」

コイの両親の故郷では食の大切さと、生命感謝の言葉があると聞き、それを素直に実行するお嬢様の態度には感動を覚えます。

「そろそろ学校の時間ですか」

「お嬢様、車を回しておきますので準備を
「分かりました。お願いします」

「はっ」

恭しく頭を下げる。お嬢様が退室すると、フーンは車を出しに、コ
ウは手早く片付けを始める。

いついかなる場合でもゼロコマンマ以内に銃で敵をしとめなければな
らない。

懐に入れる愛銃、SIG SAUER P220を確認、弾倉も2
本ある。

近接格闘に発展した時のサバイバルナイフも常備する。
時間にして数分、零点補正も済み銃をしまつ。

屋敷から出れば

「チエーさん、外は異常無しです」

王国では最高級車の黒塗りセダンを回したフーンが報告する。
常に敵が潜んで無いか警戒し、いかなる場合においてもお嬢様を逃
がす。それが鉄則である。

お嬢様が命が常に狙われているのは周知の事実であり、お嬢様自身
も自覚している所があるからこそ絶対に不安にさせない為に命を賭
ける。

「遅れてごめんなさい！」

少し息を乱しながら外にでるお嬢様、長い廊下を走ってきたのが分
かる。

「いえいえ、完全に間に合いますので、ゆっくりでも
「でも待たせたくないで」

そんな申し訳なさそうに上目使いでその言葉、
狙っている?と一部の人は言つかもしれない、それでも私には一撃
必殺です。

とにかくそんな悶絶は顔には出さず、ドアを開けて中へ導く。お嬢
様が乗るのを確認すると

「ユウ、家の事は任せた」

「了解です！チエ二さん！」

見送りに来たユウが元気良く返答する。本当に頼んだぞ…

少し不安を持ちながら、車は学院へと動き出す…。

朝の風景（後書き）

次回は学院編、ハーレム要素も入れます。

07：30

「しかし、昨夜は随分と遅い就寝でしたが…」

フェルザノ学院までは車で約40分かかるが、それでも圧倒的に近い方だ。遠い人は大陸西端で2万kmある為当然学院内寮に住む。しかし車内の時間も時間なので、時折雑談もある。

「ん、まあ予算でちょっとね…昨年の文化祭予算を今年は約20%上にしろと。創立300周年記念式典同時開催があるからという理由で」

「それは…いさか多すぎでは？」

フェルザノの文化祭は伝統に名を恥じぬ豪華さで、一般国民に魔術師の良さを知つてもらうための一大行事であり、予算配分も必ず大きくなる。そこに「割増しは大きすぎる

「生徒数はほぼ一定で、予算も増微でこの要求、しかも最高の理事会」「卒業生で国に貢献した人が天下り仕切る。老害とも言つ」から。何とかして最高10%増までに留めないと、それでも部費の削減も視野に入れないと…きついわ…」

仕事モードの凜々しいお姿をじっくり見ようつと思つたのに…

「ちつ…3か…」

下手な隠密の人間2人と高度な手練れが1人、多分そいつは挑戦状だろう。

素早く指で

「ビル上、3、警戒せよ」

フェンは前を向きながら軽く頷く。

おそらくは偵察だが、一応はSTIGをスツ「燕尾服は柄ではない

」上から触る。

「ちょっと、聞いてますか？」

「え、あ、申し訳ありません、少し…」

「 もう、 チ H 一 やん」

「 申し訳ありません」

お嬢様は少し拗ねたような可憐らしい声で全くもって怖くない睨みをする。

さつきの凛々しい姿が見れなかつた分も十分埋め合わせる顔です。本当にありがとうございます。

しかし敵がうざいな… どう始末しよう…。

人差し指を曲げて無意識に唇に当てる。

その動作をバックミラ 越しで見たリュミ H ルは少し悲しそうな顔になつたのを2人は気づかなかつた。

0800Hrs

フェルザ ノ王立学院

正門には朝早い生徒達で既に賑わつて、口 タリ には高級車が停まり、運転手や執事が降りて生徒を下ろす。

その中で

「 来たわ、イルミナルさんよ…」

「 生徒会長がいらっしゃつたぞ！」

一際高級車が正門口 タリ の一番真ん中に停まる。

生徒達は今までのざわめきが変わり、校舎までの中央通りが十戒のごとく人波が切り開く。

いつも通りに国王 S P みたいな眼光鋭いイケメン執事がドアを開けると

「 おはようござこます」

頭を下げる女性に全員が頭を下げたり見惚れたりする。

この名門フェルザ ノ王立学院において歴史上最強にして最高の生徒会会長、リュミ H ル・イルミナルの登校である。

毎度この光景を見ると、いかにお嬢様が凄いかが分かる。

まあそうだ、ここまで容貌整って性格良く最強で絶対権力の理事会を歴代では有り得なかつたねじ伏せるという事もやつてのけたお方なのですから！

「チエーさんありがとうございます」

「いいえ、お気をつけて」

完全学校モードのお嬢様はさつきまでの笑顔でなく、淑女のように公爵家長女の笑いになる。

あの仮面は親友か学友でも特別な方以外には破れません。

執事は基本的に待機か、学生ならば執事養成コスという場所で厳しい訓練をこの学院で受けます。

しかし私は特例でお嬢様の盾となりひいては学院の皆様に害なすものの駆逐を任されていますので、授業妨害無ければ自由に動けます。「さて…まずはさつきの敵が居るか…」

「見つけました！チエー・スリアさん！」

「……ちつ…何だ？」

「今思いつきり舌打ちしませんでしたか？！しましたよね？！」

「気のせいだ、チビ」

「ひどつ！成長発展途上です！」

「さいですか…」

ひょっこりと現れたのは、「報道」の腕章を付けた女性。

フェルザノ王立学院7年生、ヘッドフェル子爵家子女のレン・ヘッドフェル様だ。

15歳にしては身長が低いのでマスクコットキャラ扱いであり、私にとつては面倒な相手である。なぜなら

「今日こそチエーさんのお嬢様の強さの秘密を教えていただきます！」

腕章通り、彼女はこの学院で購読率90%越えの週刊報の記者なのである。

しかもエスで簡単に引かないジャナリズム魂を持っている。

「良く食べ良く寝て良く動く。それだけだ」

「ほつほつ…、で、本当は？」

「だから「本当は？」…」

な、面倒だろ？

てか

「私に取材してメリットは？別の記事もあるでしょう」

「今、生徒会長リュミール様に次いで注目高いのがあなたなのです！」

「ズビし！」と指される。

「はつ？」

「趣旨が良く分からぬのですが？」

「女性の救世主「メシア」！」

「ん？」

「校則違反の馬鹿共を叩きのめす人が、10人以上の女性の証言をあわせたら、特徴にあうのがあなたしか居ないんです！」

「ふむん…」

ああ、確かに校則を破りみだりに平民階級の国外女生徒に権力振るつた貴族生徒が跋扈するから討伐してくれとお嬢様に命じられて…肅清と生徒会法廷に送つた覚えが…正直お嬢様のお願いポズ以外覚えていない。

「知らないな」

「そんな事ありません！第一、イルミナル家の執事は最強の傭兵という情報もあるのですから！」

思わず吹きそうになつた。傭兵か…まあ似てて似ないが…いい加減うざいし、彼女を改めて脅威と認定する。

だがここで言われつ放しも癪なので…

「時にヘッドフェル様」

「レンでお願いです」

「…レン様、シクレットシューズは15より10cmがバレない秘訣です」

思わず顔がニヤリとする。

言われたレンは顔が真っ赤になり、俯いてしまつ。罪悪感へ。」
ません

「それでは

そのまま立ち去ると背後から
「絶対にあなたの正体見破るからな　――」

あ・火を付けたか？

しかし気にせずに目的地に向かつ。

記者セミ（後書き）

次回は少し際どいです。

妖艶なサボリ（前書き）

銃器解説は次回にやります。
少し内容が…

妖艶なサボリ

0830hrs

フェルザ ノ王立学院中央塔屋上

そろそろHRが始まる頃、私はこの学院で一番高く、唯一遮蔽物が無く、学校周辺のビルが確認出来て、お嬢様の観察が出来るポイントに到着する。

ちなみにお嬢様の観察はこれ重要。変態だつて？褒めないで下さい。

一通り生徒以外の不審的感覚は無く、敵が侵入している可能性は低い。

いや、下手に侵入すれば、学院の教師も応戦するので逆に敵にはきつい。

この中央塔は学院創立時から存在して、当時の最先端の魔術精製と彫刻から生み出された為に、学校のみならず大陸魔術師の象徴ともいえるモニュメントである。

敵がもし長距離狙撃を行つとすれば、ここから見えるはずだ。

塔の根元に隠してある、SIG P550を持ち見渡すが、敵の姿は感じられない。

「目標リスト…か」

「残念ね？変態騎士さん」

上を振り向くと…

「何だ、セネルか」

「ふふっ…お久しぶりね、また邪魔者でも出たのかしら？」

長い紫髪に整つた大人の色気すら感じ、さつきのレンとは違ひ出る所は出てる女性。

隣国で伝統主義陣営国家の一つ、ネルシア共和国の国費奨学生でここに来た一般国民でお嬢様と同じ9年生の、セネル・アラネスだ。

彼女とは既に何度か面識があり、というかここでサボつていいのでここに来れば会い、実際にこの中央塔から狙撃した場面にも立ち会つている人物である。

と、それよりも

「セネル、一応女性という事は自覚しておけ」

彼女が塔の柱の上から私を見下す形にあり、そして上を向くと、まあ見えるんだ。

しかし彼女はクスクス笑い

「前はチラリズムで煽つて駄目だつたから今回は勝負下着を大胆に晒してみたけど、興奮しない？」

「全く」

即答で断言しますよ。別に女性のを見たいわけでないし、お嬢様の笑顔や無邪気さを見る方が遙かに良いものです。

「ふうん、ちょっと悔しいわね…よつ」

柱から飛び降りる。

だからもう少し隠せつて、私は興味無くとも他人の心煽るのには十分なんだから

「チエーさん、それは間違いです。逆にあなた以外には見せません」

「心読むな

「さがですから」

しつとと言うが、彼女は生まれながらにして読心と対白防止のスキルを持ち合わせている。

他にも魔術師はそのようなスキルを必ず一つ以上持ち、例えばレンは尋問スキル「訓練された私には効きません」お嬢様は治癒強化と毒の自動排除のスキル。

さすがでお嬢様。

「私のつまらない心を見る暇あるなら授業に参加しなさい」

「ん、別に座学に関しては成績取れますし、国費奨学生でも成績があれば伝統主義陣営の中でも意地張れるし」

「ちつ」

「うわ～本心からやられた。ひどいですね」

泣いているフリするがそんなんで沈むタマじやない。
彼女は憎たらしく、まことに遺憾で不本意ですが成績はお嬢様がもちろんダントツの首席ですが、彼女は三位を突き放しお嬢様を追従する形で次席を常に維持しています。

国外の庶子がしかも小国のネルシアの人間にしては有利得ないという事で、このまま次席維持してくれれば国際会議の場でも発言力が強くなる。

まるで学生を利用して魔術師の戦争縮図を見ている？
当たりです。

ここで築いた功績と人脈は後の伝統主義陣営のみならず大陸の国際会議をいかに有利に進めるかに直結しています。

「まつ、戻った所で悪口どう私について行くかや体を見た下心しか見えないので、リュミエール大好きの変態騎士さんの心読む方が楽しいですし」

「余計な言葉が多すぎる、あと、リュミエール様だろ！」

「真剣な殺氣出してむきに注意する所が可愛い」

最初の文だけなら読心に苦労してゐる女性だが後半のから分かる通り凄く楽しんでゐる。

「もういいや…敵もいな「本当に？」？」
何を言つてる？

「とりあえずもう一回見回しなさい」

セネル真剣な声にもう一度スコープ越しから見回して

「！、いつ気づいた？」

「ふふ、私も偶然生身の人間が見えて、あれは何？」
ここから600m、学院周辺のビルの屋上僅かにぼやりと視界が歪んでいるように見える。

「異世界？」

「そんなわけない、反魔術が魔術使うわけない。あれは光学迷彩だ」

「光学？」

セネルが小首を傾げる。そういう様の事すれば少しは「可愛げある？」

「だから先読みするな…たく、あれは周りの映像を撮影して自分に投射して姿を消す、最新鋭の隠密術、狙撃や防衛兵器を敵から見えなくさせるんだ」

「幻属性魔術のステルスみたいなもの？」

「そう考えとけ、まあそんな最新鋭に頼るのは馬鹿が多い…無音魔術頼む」

「もう使うだけ私を使つて…」

と言ひながらも無詠唱で音を吸収する魔術をSIGにかける。

「ありがとさん」

不覚を取られたが、一度見破ればあまりにも楽な仕事で笑いそうになる、SIG P550を構える。

あれの致命的欠陥は、光学処理が間に合わなくて頭のようにも丸い部分の動きが丸分かり、そして敵は油断してか良く見せてくれる。レクティクルを頭に合わせれば…

問答無用で引き金を引く、僅かゼロコンマ数秒、迷彩で隠せない紅いモノがぼやけた所から飛び出し、倒れる。

軍用双眼鏡を覗いていた彼女は

「お見事」

微笑しながら拍手する。というか…

「まだ使つてゐるのか？」

「ええ、中々空を楽しく見せて貰つてます」

「そうか」

その双眼鏡は、ここからの狙撃の時、無音魔術をやつてもうう代わりの報酬に渡したものだ。

結構な支出だつたがお嬢様に銃の発砲で不安にさせたくない思いが

あれば安い！！

「まつ、仕事は終わりだ。一応座学に出とかよ

「素直に首を縦に振ると？」

「思わないな……じゃ、いつも通り口出しこそするな

私は目標を殺して一応の平和を掴んだ事に安堵してからこの事を考え塔を降りる。

そしてチヨーの背中を見るセネルは

「ふふ、あなたの事を諦めるなんて思わない事ね

小さく舌なめずりしていた。

面倒な奴（前書き）

今回は男が登場します。

こいつは後々まで面倒な事を起こす予定。

登場人物

チエニ・スキア

年齢、24あたり

身長176cm

体重70kg

年齢不確定のリュミエル専属執事になる前の記録は、あまり明かされてない。

しかし確かな事は、「殺戮機械」と呼ばれる程の凄腕の暗殺者で、一個小隊「約40名」に包囲されても、殲滅した実績がある。

銃器解説

夕霧監修

SIG SAUER P220

シグ&ゾーン社開発のピストル。

汚れに強く堅牢で高精度の命中率を誇り、非常に信頼出来る傑作銃。価格は高いのが玉に瑕。しかし高くても納得して買える一品。

SIG SAUER P550

いかなる環境でも作動するタフさを持つ、世界の小銃に革新を与えたAKシリーズに似て、泥に浸かるが、氷漬けにされようが、普通の小銃なら修理決定の環境にも決して負けず、普通にメンテナンスしたら、またほぼ元通りに使えるタフネスさと、AKを凌駕する

狙撃銃並みの命中率と射程を誇る。

しかしこれも価格が高い。

そして、P550の方が優秀だが、安い派生品に注目がいつてしまい、マイナーに……。

この作品では、CH-2は狙撃と近接で撃ちあうのに柔軟に対応する為に、闇商人からパツを買い、狙撃能力を上げて、狙撃銃兼普通の突撃銃として使用している。

他にもまだある予定だが、それは随時発表する。

1730hrs

フェルザ ノ王立学院生徒会棟前広場

中央塔での仕事を終えてからは私は、見回りをしつつ、真剣な面持ちで授業にのぞむお嬢様を観察して、軍用の固形食をかじりつつ、学院で仲の良い方と談笑しながら昼食を取るお嬢様にほつこりし、校則違反の格好で下級生に不当な恐喝する不届き者を絞め倒しながら、魔術実習でお嬢様の素晴らしい火炎魔術の自在に操った芸術に感動して、そして今、ショルダーバックを肩にかけて生徒会棟前に居る。

王立学院は中央塔を中心に、東西南北に豪華な校舎が存在します。西からの正門から、東西に生徒の座学教室棟、南が魔術実習棟、北は食堂図書館など総合棟です。

そして東校舎棟より東には大規模な攻撃詠唱の演習地を含んだ体育グラウンド。

そして総合の隣に、生徒会棟が存在する。

生徒会棟は12年制の四年生以上から、教師からの推薦で候補者を決め、選挙を経て、選ばれた12名の者にしか入れない聖地であり、たとえ一般開放されても一階の大広間と生徒会に対し一般生徒の意見陳情の部屋以外は絶対に入室出来ないようにされています。

ちなみに会長であるお嬢様は毎年教師から支持率100%で推薦を受け、選挙結果も支持率100%なので、最早会長＝お嬢様。素晴らしい式だ。

その中では今、お嬢様を苦しめる老害……理事会の皆さんと生徒会が全面対決しているようですが

議題は朝おつしゃてました、文化祭予算の大規模拡充の阻止。

お嬢様の手腕なら動かせると信じておりますが、もし駄目なようなら、ちょっと理事会のジジイどもに少し話しかけて、語りかけたいですが、お嬢様の性格ならそれを許してくれそうにありませんし黙ります。

さて、そろそろ会議開始から一時間は経過しています。確か緊急議題はこれ一つなのでそろそろ終了かと…

「あつ、お嬢様、お帰りなさいませ」

「チエーさん、お疲れ様です」

「もつたいたいなきお言葉です」

「ふふ、大げさね」

お嬢様は私を見つけると微笑して労いの言葉をかけてください。本当にもつたいたいなさすぎるー録音出来るなら余す所なく録音したいです！

「それで、文化祭の方は…」

さあ、私が理事会の反応はいかに？！

お嬢様はベンチにしてはもつたいたいくらいの豪華な材料で製造された広場の椅子に座り

「見事目標越えの5%に収められました！これで他の予算も割らば、前年繰越の予備金で何とかなります」

お嬢様は微笑しながら、報告してくれる。成功は成功の大成功じやないですか！

「それは喜ばしい事ですね」

「うん… でもね」

今度はシウンとしてしまつ。

誰だ！誰がお嬢様をシウンとさせた？！て、この場に居るのは自分だけだから私が！私なのか！

「ど、どうしたんですか？」

動搖で軽く囁み気味だ。お嬢様は

「うん、確かに凄く喜ばしいけど、私の…私達生徒会の力だけじゃないの」

「は…はい？」

どうこうことだ？あの教育省天下りで、全員ここに卒業生と変に威張る老害どもの理事会が動かせる権力は生徒会だけしかない。

そう考えると外部から、そして大きい権力…まさか

「今日は有意義な会議が出来ましたね、リュミエールさん」

ある一つの答えにたどり着く前に答えがやつてきた。

「そうですね、フェルラ王子」

「嫌ですね、ここでは副会長です」

やつて来たのは、この学院の11年生で副会長、シルバニア王国国王が一子、フェルラ・シルバニア王子である。

対するお嬢様は

「そうですね」

「…これは…学校モードでも最悪な完全な作り笑み。聖女でどいまでも寛大なお嬢様は、余程の事が無い限りこの仮面はつけない。

この男、何をやらかした？いや、大体検討はつくが…

「それにしても、フェルラさん、あの紙は…」

「ああ、頭の固く自分本位な理事会の皆様に自重してもらおうと」「陛下に一筆したためていただいたと」

「まあそうですね、これで会議も円滑に済みましたし、会長も大分楽になりましたでしょ？」

「ええ…まあ」

……お嬢様が怒りを持つ理由が分かつた、てか予想通り過ぎだ。はつきり言おう。この男、馬鹿だ。

お嬢様の性格をまるで分かつてない。

お嬢様はたとえ不利な戦いでも、逃げず、前に立ち、生徒の意見を尊重して時には無茶を厭わず、嫌みに対しても強靭な精神力と持ち前の優しさや凜々しさに惹かれた名も無き者達の奮闘により勝利を

掘んできた。

真正面馬鹿正直は馬鹿を見る世の中と吐き捨てる馬鹿も居るが、条件が揃い、真に人から支持される者は真正面馬鹿正直を貫けば、どんな裏工作でも現代科学が生んだ最悪な核兵器でも禁魔術よりも強いものを手に入れる。

それを体現したのがお嬢様である。

しかしこの王子は父親である国王陛下の文書というチートを使うだけの人間である。

確か三男のはずだから継承権第三位…神様、頼みます。間違つてもこいつだけは国王にしないで…。

「今後は私達、王立学院の生徒会のみで対処出来るように、精進しましょう」

「はあ、まあ会長がそうおっしゃいますならそうしましょ。ではフェルラは成功したのに何でお嬢様がイラついているのか分からないうだ。

しかも私の事がん無視だし。

まあ私の事はいいとしてお嬢様のプライド踏みにじった野郎には後で闇討ちしてやる。
と思つていたら。

「悔しいな…」

「えつ…」

振り向くと、お嬢様が悔しさを滲ませ

「たつた一筆に負けたなんて…、陛下なんて関係ない、負けは負けを屈服させます！」

「お嬢様…」

なんて声かければいいか分からぬ。しかしその瞬間立ち上がり

「だから次は負けない！副会長がまたあの手段を使う前に、理事会を屈服させます！」

「その意氣でお嬢様！」

自分で自身で乗り越えようとするお嬢様に痺れる憧れるう！
しかしまた次の瞬間

くうう…

さつきまで威勢良かつたお嬢様はぺたんと座り込み、両手をお腹の上に置き、俯き

「…聞こえた？」

「ええ、可愛らしい音がしました」

「~~~~~！」

さつきまでの学校モードの仮面も全て脱ぎ捨てて、真っ赤になつたお嬢様の顔。しかも上目使い。

ぐはっ！致死量手前の破壊力だ！

ちなみに致死量に達した場合の死因は嬉死「うれし」である。

「お昼ご飯、この会議緊張で食べれなくてね」

あたふた弁明するお嬢様、やめてくれ！致死量に達する！だが本望か、体は要求してくる！

まあ死ぬ前にお嬢様のために用意したものがある。

「お嬢様、じやあこれを

「え…あつ！」

私がバックから取り出したのはお嬢様が愛してやまない、庶民のパン屋さんのチョコ口口ネ。

本来なら、学校や家にもたくさん高級な貴族が好むチョコがあるが、お嬢様はたまたま私が買ってきたチョコ口口ネを食べてからすっかり虜になつたようで、時々、皆にばれないように、買つてきている。もしこれが奥様や当主にばれたら…どうなるかな？

お嬢様は目を輝かせながら

「でも、買いに行く時間があつたの？」

「裏技ですよ、少し仲良くなつた人に頼んで」

「へえ～

お嬢様は納得してくれる。

本当はさつき恐喝で絞め倒した不良生徒にパシラせて、買わせました。

まあ恐喝という重罪に学校脱走の罪が付くだけだし、別に大丈夫でしょう。

え？ 鬼畜だって？ 誉めないで下さい照れるでしょう。

「いただいても？」

「どうぞ、今なら周りに人の気配は感じませんので」

「いただきます！」

お嬢様は包みの袋を開けて、頭の細いほうからかじりつき、飲み込んでから

「美味しい！」

今日一番の満面の笑み、

駄目だ… もう思い残す事はないぜ……

チエニ・スキア、リュミエールの笑顔にやられて立ちながら逝く。

ちなみに、機能停止時間は、リュミエールが不審に思つてチエニを搖するまで続いた。

面倒な奴（後書き）

次回は戦闘回です。

晚酌（前書き）

戦闘回と書きましたが、チヒーの昔話を多くする為に、後回しにして、今は主要キャラを全員登場させます。女性が多めですが、後に男性も追加します。

2300hrs

イルミナル邸

深夜になり、周りの木々は少し強い風でざわめく。

お嬢様は最初はまた生徒会のお仕事をするつもりでしたが、遂に力尽きさつき就寝しました。

お嬢様の寝顔もいいです。ええ。

しかし留意する事項が二つ。

一つは朝に感じた敵の残り2人からの襲撃は無かつたこと。気配からして一人はかなりの手練れ、逃げたとは考えられず、日を改めてくるかもしれない。

警戒は必要だな…。

そしてもう一つはあの副会長。

とりあえず次ふざけた真似したら潰す。

さて、私でもお嬢様の愛しやよつけ足下に及びませんが楽しみはあります。

え？意外？心外な。

食堂の隣、料理部屋にある机に酒と菓子類が用意されている。

「よつ、来たな」

少し赤が混じつた金髪で姉御肌的なサバサバした妙齢の女性が片手を上げて待っている。

「待たせました、ルノーさん」

彼女はメイドのコウの直属上司で侍従長のルノー・ハイネさんである。

私が来た三年前から既に侍従長で、私に執事の作法を叩き込んでくる。

れた恩師であるので敬意を持つて、さん付けをしている。

本来なら当主あたりに付いていくが、家の留守を預かりたいと志願して、ここに居て我らの姉さんにもなつてもらつている。

ちなみにシェフは近くの村から来るので既に帰り、運転手のフーンは酒が飲めないからいつもこの晩酌の時は愛銃持つて屋上で警戒してくれる。彼も元王国軍で戦闘員としても優秀である。代わりにお嬢様が学院の休みの日は私が警戒します。

「気にしてないさ、ウイスキー行く？」

「ハフで」

「あいよ」

彼女は慣れた手つきで氷を入れて1：1で作る。

「心行くまで飲め！」

「あざつす、でもその前に」

「そうだな、忘れかけてた」

笑いながら彼女はストレートにして、互いにグラスを持ち

「お疲れ様です」

チン、と音を響かせてから飲む。

やはり瓶でも、未調整のタイプで、アルコール度数60だから水で割つても強い。しかし

「ふう…うまい」

「ストレートで良く半分飲めますね…」

グラスにあつた分がかなり無くなつていて

「まあ、このくらいのお酒から私をピリッとさせてくれるのよね、ビールや果実酒、調整されたウイスキーは刺激が足りないのよ」

「そうですか」

彼女の酒に対する強さに驚き通り越して凄いの感想しかない。

「そういえば…今日は目標を一人始末したと聞いたけど？」

ナツツを食べながら彼女が聞いてくる。

この人は私の前歴が暗殺者と知り、気軽にそういう話が出来る少な

い人の一人だ

私もナツツを貰いながら

「三人組の恐らくは一番下手な奴ですね。光学迷彩みたいな高級品を持ちながら、メリットデメリットを理解してませんでしたし。多分捨て駒の様子見。一番の手練れ、恐らくはリダは結構やりましたね。あとはどの位のレベルかが気になり、いつ来るか…」「誘つておいてなんだけど、今お酒飲んで大丈夫」

「ホント今更ですね」

私は思わず苦笑してから

「大丈夫です。この程度なら酒に強い自分にとつてはむしろ高揚効果ありますし、照準はブレません。それに、基本的にこの時間帯で奇襲するのは余程の自信が無ければ出来ません」

「へえ、どこの教訓」

「自分が暗殺者ならと考えてです」

もしこの執事をクビになり、また暗殺者に落ちた時に、お嬢様を暗殺しろなんて言われたらそのクライアントを殺しますけどね。とりあえず灰も残しません。

彼女はクスクス笑つてから

「あなたがリュミエール様を暗殺なんて、失敗するとしか思えない。例え初対面でも取り込まれそう」

「同感です」

私も笑つてウイスキーを口に含む。

そのとき、はたと気づく

「ふむ、そういうばくウを見かけないな…」

「ん？ああ、あの子ならフーンの所にココア持つてかせたのよ」「へえ、確かにフーンは甘党だし、コウはココアや紅茶などを淹れる技術だけは一級品だからな

「でも遅いな、あいつなら無事故達成宣言する為にわざわざ戻つてくる奴なのに」

「そんな宣言よりも、彼の近くに居たいんでしょ」

「？、どうじうことだ？」

「鈍いね～、あの2人はまだ告白していないけど、普通に恋人同士だよ」

「！」

驚きで固まつた。本当に気づいてなかつたんだね～と、彼女は微笑しながら

「私もつい最近見つけたけど、朝の食堂のテ ブルセッティングや、他にもあなたが学院で行動してる時なんか結構イチャイチャしてゐわよ。だからさつきフェンにココア持つて行き言つたら、ちやつかり2人分持つて行つてるのよ」

私は意外なものを感じた。あのしつかりのフェンと食器の破壊神ユウがか…互いに真逆に惹かれたのか？

「まつ、こういう初々しい話は私結構好きだから、応援するけどね」「本当に好きなんですね…」

目が輝いていますよ…。

「あなたも少しはリュミエール様以外にも興味示したら？」「だが断る

「即答ね」

お嬢様以外を愛でると?何を言つんだ。それよりも、「ルノーさんこそ、そろそろ彼氏でも…」

「……ふふつ、チエ二君？」

あつ、地雷踏んでしまつた?いやわざとだけど

ウイスキーを最後は一氣してから

「では、『」馳走様でした」

「あ！こらー！」

私は部屋から緊急待避さー！

さて、良い話を聞いた事だし、あとでフェンをからかおうかな。少しイタズラめいた笑みを浮かべながら私は廊下を歩く。

ルノー 視点

「エリックが足早に去つたあと、私は最後の一呑みを飲みきり、刺激と風味を楽しんだあと

「お嬢様の話し相手になり、出来の悪くても可愛くて仕方ない部下を見て、その子とまじめ君の恋愛模様が見れて、そしてあんたと晩酌が楽しめれば十分幸せなのよ、エリック」
今は居ない奴に向けてそう呟いた。

執事の長い夜 起動（前書き）

誤字指摘がありましたので、一度削除しました。

携帯投稿の場合、どうすれば誤字の部分だけ直せるのでしょうか？

次回はチエニが人外になり、残酷描写がたくさんですがご了承お願い申し上げます。

その次は甘くなります！なりたい！

執事の長い夜 起動

0230hrs

某所

もはやここに来る事は無かつたと思っていた。
3年前、私設兵士共にやられかけたこの場所。周囲はスラムで、その真ん中にある旧倉庫街。

ご丁寧に電灯が新しくなっている。

ルノーさんと別れたあと、私の部屋の窓に見覚えあるフクロウが居た。

暗殺依頼を受けるギルドから放たれる緊急用フクロウ。
くちばしには手紙をくわえている。

内容はここに来い…と、

誘い込んだ事はいくつもあるが誘われるのは初めてだ。
一応水を2リットル飲んで薄め、愛銃を持ち、手榴弾も携行して、侍従用の車でここまで来た。

「来てやつたぞ！」

P550を肩にかけ、指定された場所に着く。
そして、目の前の倉庫街十字路の陰から

「良くなりましたねえ…」

「お久しぶりです先輩。お元気でしたか？」

目の前に居る細身の男、ギルドでも特Aランクの仕事をしていた、
「透明人間」カル・セイズ。裏では大陸十指の第三位で特に隠密と超長距離狙撃のスペシャリストであり、ギルドと契約している私が所属していた暗殺組織の先輩。彼は微笑して

「ええ、まあ今もぼちぼちやってますよ、ねえ殺戮機械」

「そんな名前は捨てたさ」

忌々しいあだ名、昔を思い出す、いや、暗殺組織に入る以前の記憶は無いが…

彼は続ける

「裏ギルドでは「殺戮機械」と呼ばれる大陸十指の元第八位の戦闘力、隠密姓、無駄の無い思考での一対多数の殲滅力…民間人を巻き込まないという非情じやない思考で任務を長引かせた失点はあっても、特Aランク任務成功者の肩書きでどこかの裏組織や傭兵に居ると思いましたよ、まさか口の下で最も輝くイルミナル家の狗とは」

「狗とは酷いですね、一応執事という肩書きはあります」

「お嬢様の狗…ならいいかな。しかし

「先輩が私の敬愛すべきリュミエールお嬢様を狙っているのですか

？」

彼はうんと呟いてから

「本当は反魔術過激派からCランクでギルドに依頼は来てましたが、しかし別の過激派がBランクの奴でもあっけなく死んだと聞いてね。見に行けば君が戦っている。最初は何の冗談かと思ったけど調べたらね…」

「なるほど…」

だから一人だけ気配の遮断の調整が出来ると思つたら、大物すぎだ

…。

これは私の命は正直やばいな…今の状態で戦闘力なら私に分があるが、一度見失えば彼の技で五感を狂わされ透明人間に感じ、気づいたら後ろから首を掻かれる、互角じやない…でもその前に…

「見物人は要らない」

素早く懐から抜いたP220が倉庫の屋上に向けて弾を放つ。

「がつ！」

何もない空間から血を吹いた男が現れ、ぐつたりする。

「さすがだな、彼らは光学迷彩を使用した兄弟で、2ヶ月後にはBランクに上げる予定の奴らだつたのに」

「じゃあ随分ギルドもレベル基準を緩和したんだな、こんなのがBとは」

「同感だが仕方ないんだな」

「どうしたことだ？」

その話に疑問を感じる。3年前まではもっと精強な奴らがBやCに居た。

今の奴らはせいぜいCクラス…。

その時、カルはニヤリとして

「それは、この状況を切り抜けたら教えましょう」

「はつ……！」

聞き覚えのある幾重のブツ音が、しかも多い…。

見回れば、銃器を持った奴らが下卑た笑いを見せて屋上や後ろに居て、前方にも気配を感じる。

「3年前と一緒に何をしたいんだ？」

「ふふ、君が3年前、ここで戦った兵士達と同じ状況が見たくてね、あと、君は任務失敗の挙げ句雲隠れした罪で見つけて仕留めたグループには2億レリル、そして階級昇格が約束されているんだ」

「笑えねえ…」

まさかここまで高額賞金首になつてたとは…

しかも数は気配も含めきつちり40人、3年前とぴったり、さらには電灯を新しくしてあり、深夜なのにちゃんと相手が見える

「あとは当時みたく雨が降れば完璧だが…それは叶わないみたいだ」

「しっかりと計算しやがつて…準備が良すぎます」

「褒めて頂き光栄」

「褒めてません」

「まつ、それはともかく

スルか…と少し怒りを感じた時

「君がここでくたばつたり、殲滅出来ない腑抜けになつてたら、君の愛しい人も含めて全員殺しちやうぞ、あのお嬢さん斬りつけるなら、さぞ良い声で鳴いてくれそうだ」

言つとペロリと上唇を舐める。そしてゾッとする私。この行動を取るのは彼の本気の意味。

「貴様……」

「お～、少しは昔の感じになつたね、その調子だ。それでここを切り抜ける。そしたら今の裏の世界の話と、君の人たちは傷つけないさ」

「…本当だな？」

「ああ、では高みの見物と行こうかな。アーティオス！」

笑いながら、奥に消えていく。まあどうからか高みの見物をするのは間違いないが今は関係ない。

お嬢様、そして皆を守るため

「お前ら…運が無かつたな…」

静かに呟くように言つと、周りからは余裕の笑いが聞こえる。

今から絶望の悲鳴の旋律に変わる事も知らず…。

「悪いが俺はどうしても手加減が出来そうにない…大人しく…死ね」

昔の俺口調に戻り、声も冷え切つた刃のような声色になる。

目を瞑り…そしてゆっくり開くと

「――――――――」

敵達に戦慄が走り、まわりに殺氣という絶対零度が流れる。

茶色の瞳は瞳孔が開いたように透いて、一つしか考えない。

人をいかに殺すか…3年ぶりの「殺戮機械」の正式起動である。

「せ…制圧射撃だ！屋上の奴ら撃てえ…！」

「ウオオオ！…！」

リーダ格が叫び周りは振り払つように叫びながら

「…

さて…始めよ…

血で血を洗う凄惨な地獄によつて…。

執事の長い夜 殺戮（前書き）

チエ 二は殺戮中は何も考えず、体が動くので、代わりに力 ル視点で実況します。

チエ 二が人外になりますので注意。

6 / 15

0245hrs

力 ル視点

「ふふ、やはり君は逸材ですよ…」

啖きながら田の前に広がる楽しい光景を眺める。

倉庫に挟まれた細い路地に20人近いギルドの奴らが両方の倉庫の屋上から密度と範囲のある制圧射撃が行われる。

しかしチエニは動搖なんて微塵にも感じさせず華麗に避ける。

避けるというより、敵の銃口の動きを田と勘で全て判断して、弾が来ない地点に素早く移動していると言つた方がいい。

更に彼はP220で的確に右側倉庫上の敵の眉間に撃ち抜く。

おいおい、もう恐怖に怯えている。情けねえ…

「ん?」

制圧射撃が不可能と悟つたが、まだ損耗してない左側が逃げ始めて…許さないようだな。

チエニはスツの内側から、暴徒鎮圧用のゴム弾銃、そして破片が詰まつた大きめの手榴弾。

ピンを抜いた手榴弾を空に向かい投げる。

これじゃどこにも当たらず落ちてくるが、と、思つたら。素早く移動して角度を変えてゴム弾を放つ。

これで手榴弾は逃げた目標集団の前に落ち…

ドンッ！と大きい破裂音と同時に、中に詰まつていた破片が集団を襲い、切り裂き、体内にめり込み全員戦闘不能にする。呻く者もやがて死ぬだろう。

もう片方は殺傷より風圧のある小さめの手榴弾を使う。

吹き飛んだ内数人は倉庫上から下に落ちて全身骨折やら何やら大変な事になつてゐるだろつ。

「ふむ、しかしなぜ手榴弾を変えたか…」

合理的な思考になる彼にしてはいささかおかしいと思つた時、答えが分かつた。

「撃て撃て撃てえ！！」

既に発狂寸前のチエニ包围組が小銃を撃ちまくる。

上からと違ひ火線が水平な分穴が少ない。

しかし…

「！！！」

「あああ…」

屍になつた人間を担ぎ盾にする。

防弾チョッキ類を持たない彼が考へた防御方法、人間を敬わず、屍を遠慮なく道具にする。

素晴らしい…。

射撃を止めると、今度はナイフを持つた2人が一気に近接格闘を始める。

射撃不能だから近接に変えても無駄だ。

冷静に捌いて、1人のナイフを持つ腕を止めて、裾から出した細いナイフで首を搔き、もう1人はカウンターで喉に突き刺し、呻く前に絶命する。

そしてチエニの背後、人が居ない方の十字路の物陰から好機と考えた4人伏兵が飛び出しが、構える前に、さつき殺した奴のナイフ一本と、自前を懷から一本を投げると、見事に目標の腕に刺さり、銃がぶれた瞬間、いつの間にか弾倉変えてたP220で全員撃ち抜く。

既に半数以上の人間が既に死ぬか、絶望の呻きを上げて死んでいく。生き残りが恐怖で動きが止まっている時に、P550の肩掛けベルトを足に引っかけ持ち上げて、さつきまで威勢良く撃つていた集団

に向けて構えてフルオートセレクタで全弾横一閃に射撃する。

「うわあああ！」

「逃げろ！逃げろ！」

「「めんなさいーー」めんなさいーー」

「化け物だあ！！」

恐怖で全員が逃げ出す。

しかしそれを許すわけがない。

撃ちぬくしたら3秒で弾倉を交換して追いかける。

あとは弱いものいじめの究極、殺戮するだけだった…。

0310hrs

チエ二視点

仕事を終えると、やつきの場所まで戻る。田は普通に戻り、周りの惨状を見る。

「久しぶりだな…」

特に悲しみも罪悪感もなく、集団殺戮の感触を懐かしむだけであった。

その時に拍手が

「良く出来ました。中々楽しめたよ」

晴れやかな笑顔を浮かべるカル。

「約束は果たした。お嬢様には手を出さないだろうな？」

返答次第では良くて相打ち、悪くとも戦線復帰不可能にする。

後は優秀なファンと私の心当たりある将来有望な奴にお嬢様を任せる。

「ああ、もちろん。但し、君は殺さないといけないから、時々顔

出すかもな

「おい…」

顔が引きつるのが分かる。

お嬢様の為ならいくらでもやるが私闘でここにと戦うなんてまつぱり「めんだ。

「2億レリルを田の前にして殺さないなんてもつたいないだろ？まあ今回は武器も尽きて、疲労が溜まっている君と戦つてもつまらないし、もう一つの約束が果たせないから止めとくさ」

「約束？ああ、ギルドの事か…」

ギルドの兵隊は明らかに弱体化していた。

証拠に昔なら、怪我の一つは負っていたのに、今回は返り血はひどいが怪我は全くしていない。

「まあ話すと長いが、簡単に言つと傭兵協会と全面戦争して大敗北した」

「…、傭兵協会が？」

この大陸は、魔術と国際発言で国力が決まるまだ平和な伝統主義陣営のようない地域もあれば、魔術を退廃として科学至上主義で平和維持活動の名の下の軍時併合及び戦争を繰り返す先進主義陣営、技術格差の大きさから軍拡と戦争繰り返す軍事主義陣営と、大から小まで多くの陣営が居る。

そんな戦争多い地域に必ず居るのが傭兵である。

金を払えば煩わしい兵士教育をしなくても技術的に高い兵士が来るからだ。

その個人傭兵の管理や同じ戦域に複数の傭兵团が集まつて、いつの間にかそいつら同士が争わないよう監視と仲裁して、ランク付けして、虐殺や集団強姦などの戦犯や組織的に傭兵の名を落とす者達への制裁を加える目的で結成されたのが大陸中央の超大国、ティガ連邦に本部置く傭兵協会である。

傭兵協会の権威は凄まじく、協会未加入の傭兵は基本的に採用されない。

対して、暗殺や諜報、虚言の流布、更には国や自治体にとつては問題な資料を消したり、テロをしたり、別の意味で戦場を暗躍し、大陸全土に支部がありギルドである。

これも高い権力があり、ランクは特A～Eまでで、このランクを持

たない人、また自分のランクより上の任務には絶対に参加させない。しかも規約を守り任務遂行するならどんな組織も、極端な話国際指名手配犯も、ギルドに加入してランクの任務を出来る。更に支部があるので簡単に任務が受けれて、高額報酬も受け取れる。

なのでほとんどの暗殺組織や殺し屋、他諸々がギルドに集っている。以上の二つが、この大陸の一大裏世界組織で、表にもある程度黙認されている。

しかし傭兵協会とは表の戦場と裏の戦場である、ギルドとは混じりがなく、基本的友好なのに…。

「3年前、君が行方不明直後、ギルドの一部の馬鹿共が、傭兵協会を襲撃、協会長含む数人が不意を衝かれて抵抗出来ず死んだ」

「！？、規約違反では？」

ギルド規約第8条には傭兵協会に喧嘩売る任務は受けるな、実行するなどあつた筈だ。

「その通り、大方、傭兵協会で傭兵のマナーが飛躍的に良くなり、正規軍の高級将校が鬱陶しさを感じて依頼して、報酬の高さに目が眩んだ奴らが軽いノリでやつたと思うが、後が凄かつた、想像出来るだろ？」

「ああ、はっきり分かる」

傭兵協会のトップ陣は、知らなければ鉄拳ものの彼らにとつては崇拜すべき者たちである。その者たちが殺される、しかも信頼してたギルドに…力…ルは続ける。

「協会は即時に戦闘許可、集団戦法の傭兵は素早く各支部の連絡を遮断、的確に襲撃して壊滅させた。個人主義のギルドは逃亡したりして、結果、戦争集結後には戦力の大幅ダウンをしていたのさ。だから戦力拡充のためにとランク昇格がしやすくなり、こんな体たらくなのさ。もう昔に戻る可能性は低いな」

「そうだったのか……」

愛着はないが、元の所がそんな事になつてたとは。

「で、君に一つ見せたいものが

「?、なにを…」

言い掛けで言葉が止まる。目の前に居た力 ルが消えたのだ、そして私の首にナイフを突きつけている。

「先輩…」

「ふふ、驚きましたか?私、魔術使えるようになつたのですよ。まあ方法は内緒ですが」

笑つているがこちらは笑えない。こいつ約束破る気か?更に続ける

「チエー」一応聞くが、ギルドと組織に戻るつもりはないか?今なら戦力回復と喜んで、罪は消えるが…

「……くくつ、愚問ですよ先輩」

殺されてもいいから是非言わせて貰おう。

「私の生命は3年前から1人の女性に捧げると決めました。何があらうと私は裏切り、他の組織に入るなんて、有り得ない。絶対にはつきり言つ。そうすると、力 ルは笑いながらナイフをしまい。「OKOK、それでいいんだ。いや~安心したよ。もしこれで組織に戻るとか言い出したら殺して換金するところだつた」「だつたらそんな提案しないで下さい」

本当にこの人の考える事は分からぬ。

「まつ、今回はここでお開きといつことで、今度会つときは覚悟しろよ?」

「出来れば未来永劫無い事を願います」

力 ルはそのまま立ち去り、やつと静かになる。

「早く戻らなければお嬢様に見つかる」

お嬢様を心配させるのは言語道断、幸い怪我はしてないので、早く血を洗い流していくも通りにお嬢様の起き抜け顔を見る。癒やしを求めて全力で家路につく私であった。

ちなみに遺体はどうする?警察に任せましょ。

銃は生産直後に登録から外れた裏の品なので、捜査しても、どの銃

が使用されたなんて分かりません。なので証拠〇ですがなにか？

執事の長い夜 殺戮（後書き）

皆様にアンケートです

実は、次の話で今後が変わるのでですが、

チエニトリュミルの関係が一気に進展する

または

まだ関係は進展しないの2つです。

どちらも私にとって面白いのですが、皆様はどういう方が良いか聞きたいと思います。

良いと思つた方を選んで感想欄に下さい。

基本的な話の展開は一緒ですが、会話の内容が変わります。

感想が無ければ、前者は奇数、後者は偶数の日でサイコロで決めます。まさに神のみぞ知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5365y/>

元暗殺者現執事

2011年11月21日14時29分発行